

「*i の折れ」考 — 蒙古語における *i 音の発展の規則性と不規則性 —

栗 林 均

1.

蒙古文語 (Written Mongolian) の正書法は、一般に蒙古語のより古い発展段階を反映していると考えられている。⁽¹⁾これについて N. ポッペは次のように述べた。

「古代蒙古語 (Ancient Mongolian) は共通蒙古語 (Common Mongolian) とほとんど合致していた。蒙古文語は音声的・形能的発展の観点から古代蒙古語をよく反映している。」⁽²⁾

このように、蒙古文語が古代蒙古語を、さらには共通蒙古語をよく反映しているということは、多くの経験的事実の支持するところでもある。このことから、蒙古文語をもって共通蒙古語と仮定して、蒙古語の史的・比較研究をすすめていく方法が考えられる。じっさい、蒙古言語学の分野で先学たちは、こうした見通しにたって、蒙古方言の記述的研究と並行して、方言形と蒙古文語形を対照してその歴史的発展の説明をこころみてきた。そうした研究は、方向性において是認されるばかりでなく、その研究の蓄積は現在でも重要な意義をもつものである。

しかし、蒙古文語を共通蒙古語とみなすのは、あくまでも作業仮設であって、検証ずみの定説として両者を同一視することは避けなければならない。仮設は検証されねばならず、また反証される可能性をも含んでいる。蒙古語の史的・比較研究にとって、蒙古文語が汲めど尽きせぬ資料の宝庫であることは疑いないが、その資料としての価値と限界について、常に反省を怠ってはならないであろう。

蒙古文語のなかには、新しい時代に口語からの類推によって作られた正書法が混入している可能性がある。かつて服部四郎氏が蒙古文語の edür (日) と ebül (冬) の第 1 音節の母音について論証されたように、⁽³⁾蒙古文語では他の一連の語と同じ様式の正書法をもっていながら、蒙古諸方言の形を比較してみると、対応の公式に合致しない場合がありうる。こうした、いわば「まがい」

の正書法が蒙古文語のどこに潜んでいるか、前以て判別することができない以上、蒙古文語形の資料としての価値は文献学的研究や諸方言の比較研究の裏付けをまっけて、はじめて確実なものとなる。

蒙古文語が、いわゆる「文字言語 (Written language)」であることによる条件も考慮しないわけにはいかない。いかなる書記体系も、それをあらわす音声言語の資料として利用するためには解釈をほどこさねばならないのであって、蒙古文語もこの例に洩れない。たとえば、蒙古文語の正書法では語頭音節の円唇母音をあらわすのに男性母音 \mathfrak{d} , \mathfrak{o} と女性母音 \mathfrak{d} , \mathfrak{o} の2種類を書き分けるだけであるが、これは純粹に表記上の制限によるもので、蒙古文語の基礎にあった言語の特徴をそのまま反映しているとは考えられない。このように蒙古文語が書記体系として解釈を必要とする点は少なくない。

上に述べた二つの問題が解決されたとしても——つまり文献学的な批判と書記体系としての解釈を経たあとでも、蒙古文語の比較方法論上の位置づけに関する問題が残る。蒙古文語が他のいずれの方言にも増して多くの古い特徴を保存しているにしても、いずれかの(あるいはすべての)蒙古方言が蒙古文語の基礎にあった言語に直接さかのぼることが明らかでない以上は、⁽⁴⁾比較方法論上、蒙古文語も他の諸方言と同列に置かれるべきである。こうしてはじめて、蒙古諸方言のうちにも蒙古文語ですでに失なわれている、より古い特徴が見い出せる可能性がでてくる。一例をあげると、モンゴール方言 (Monguor) では f や x にはじまり蒙古文語では、これに対応する子音が表記されていない一連の単語がみい出される。この点に関して蒙古文語の正書法が表記上の制限によるものか否か即断はできないが、その基礎にあった言語の特徴を反映している可能性もある。後者の場合、上記の語頭子音の保存に関して、モンゴール方言の方が蒙古文語の基礎にあった言語より古い特徴を保存していることになる。上は有名な例であるが、これに類似の事実が将来の研究によって明らかにされる可能性も皆無とはいえない。

この小論では、蒙古文語の第1音節の i に対応する蒙古諸方言の母音をとりあげて、それらの関係を論じるが、とりあえず、蒙古文語における i が共通蒙古語の状態を保存していると仮定して、これを蒙古語における^{*} i 音の史的発展の問題と呼ぶことにする。

2.

蒙古語の歴史のなかで、「 $*i$ の折れ」は近代蒙古語のメルクマールのひとつである。⁽⁵⁾ N. ポッペは蒙古語の史的発展を概観するに際して、16世紀にはじまるとする近代蒙古語 (Modern Mongolian) の特色を大きく三つにまとめた。そのうちのひとつは次の特徴である。

「母音の $*i$ が一定の位置で別の母音になった。」⁽⁶⁾
これがすなわち、「 $*i$ の折れ」と呼ばれている。

ここで、ポッペが星印を付してあらわした $*i$ の意味するところを明らかにしておかねばならない。比較言語学で星印を付した形は、再建された形あるいは文献によって実証されない推定された形をあらわす。しかし比較方法論上、これに価値の異なる2種の場合を区別しておくことは重要である。ひとつは、利用しうるすべての方言資料を比較して、その対応の公式からたてられた厳密な意味での再建形であり、もうひとつは限られた資料から arbitrary にたてられた、仮説としての推定形である。ポッペの「 $*i$ 」の用い方をみると、氏は蒙古諸方言を比較して、 $*i$ のもとに諸方言の母音対応の規則を提示してはいるが、また、そうした規則にあてはまらない多くの場合(例外)をも、説明がつかないままに $*i$ のもとに含めている。したがって氏のあらわす $*i$ は厳密な意味での再建形に限って用いられているのではなく、仮説としての $*i$ だということができる。その完全な検証は将来の研究に委ねられているのである。

諸方言の母音対応の公式が未完成のうちに前以って $*i$ を仮定する依りどころは何であろうか。1.の冒頭に引用した文章から、ポッペは蒙古文語の i が共通蒙古語の状態を保存していると考えているものと思われる。つまりポッペの用いる $*i$ は、1.でわれわれが仮説としてもうけた $*i$ と同じ領域をカバーするものとみて間違いのないであろう。

さて、蒙古文語の i に対応する、諸方言の母音のあらわれは、一見、きわめて複雑な様相を呈している。 $*i$ が「折れ」て別の母音としてあらわれる多数の語がある一方、また i として保存されている語も多数にのぼる。ある方言では $*i$ が「折れ」て、他の方言では i として保存されているという、多くの「方言間の不一致」があるが、これに関しては不十分な説明しかなされていない。最大の問題は、諸方言においてどういう条件のもとに $*i$ が「折れ」、また i として保存されるか、ということであるが、「すべての場合をカバーする確定的な

規則をたてることは不可能である」⁽⁷⁾という。「*i の折れ」の説明にはつねに例外がまつわりついて離れない。また「*i の折れ」のうちにも、*i 音が先行の子音を口蓋化子音に変えたり、わたり音化して**i* の痕跡を残している場合と、後続音節の母音に完全に同化して、**i* の痕跡の全くみられない場合とがある。このように蒙古語の**i* 音はきわめて変化に富んだ発展をとげた音である。

蒙古語の**i* 音の史的発展について、最もまとまった論考は N. ポッペの『蒙古語比較研究序説』⁽⁸⁾のうちにみられる記述であろう。同書の「第1音節の短母音」を扱ったセクションでは、26頁余の全体のうち「**i* と **i*」の項目だけに12頁があてられている。他の6箇の母音に割かれている説明が平均2~3頁であることからしても**i* 音の変化の複雑さをうかがわせている。ここで、第1音節の**i* 音の史的発展に関して、ポッペが上記の著作の中で提示した図式の概略をたどってみよう。⁽⁹⁾

ポッペはまず、**i* の「折れ」を定義する。「折れ」は単にある母音が別の母音になったというだけでなく、それが「第1音節の母音」についてのみ、さらに「後続音節の母音に対する同化」によって変化した場合にのみ適用される。

第1音節の**i* 音の史的発展は次の二つに大別される。

- (A) **i* が規則的に *i* として残る場合、
- (B) 「折れ」が起こる場合。

上の分類に関して、多数の不一致 (numerous inconsistencies) があるという。それは方言間の不一致をさすものと思われる。

次に (A) と (B) の発展を決定する条件が述べられる。まず (A) の「**i* が常に保存される条件」に二つある。

- (a) 単音節の語幹、
- (b) 第2音節に**i* が**e* を含む2音節以上の語幹

上の条件は、ブリヤート語を除いて、すべての蒙古語においてあらゆる場合に**i* が *i* となる通則である。ブリヤート語では、(a) の場合のみ通則に従いが、(b) の場合には *e* (語頭では *je*) になる。⁽¹⁰⁾ 通則に対する例外には二つの場合がある。

- (c) モンゴール語では語頭の**b* の影響により、**i* が *u* となる。
- (d) 少数の語で**i* が *e* となる。

最後の場合は、後続音節の母音への同化によらない変化をさすものと思われる。ポッペの挙げている例は二つあって、ひとつは蒙古文語の *ki-* “to do, make,

put” に対応してブリヤート方言 (xe-) など e があらわれる例。これは ge- “to speak” とのあり得るコンタミネーションと、推定している。もうひとつは、蒙古文語の nigen “one” に対応してハルハ方言 (negə) 等多くの方言で e があらわれる例である。ポッペは、蒙古文語の nejile- “to unite”, nejite “together” 等の語幹の影響の結果かもしれない、と説明している。

以上述べてきた (A) の条件にあてはまらない場合には、すべて $*i$ が「折れ」ることになる。 $*i$ が「折れ」る場合を網羅したのが (B) で、そこでは、「 $*i$ の折れ」が後続の音節の母音に対する同化という観点から、第 2 音節の母音の種類によって、次の 10 通りの条件があげられている。(1) $*a$ および二次的な \bar{a} の前、(2) $*u$ の前、(3) $*\bar{u}$ の前、(4) $*aru$ の前、(5) $*eg\bar{u}$ の前、(6) $*ur\bar{u}$ あるいは $*ir\bar{u}$ の前、(7) $*\bar{u}g\bar{u}$ あるいは $*ig\bar{u}$ の前、(8) $*ura (>\bar{o})$ および $*ua (>o)$ の前、(9) $*\bar{u}ge (>\text{長母音})$ の前、(10) 二次的な o や \bar{o} の前。それぞれの場合に、 $*i$ は異なった発展を示すことになる。

3.

蒙古語の第 1 音節の $*i$ の史的発展を説明したポッペの図式は、多くの方言資料を駆使した詳細な記述であるが、未だ完全なものではない。ポッペみずから説明の随所で述べているように、それにはあまりにも多くの不一致や例外が伴っている。われわれは、例外を例外のまま放置しておくわけにはいかない。例外には、なんらかの説明が与えられねばならないのである。図式における例外を直視して、例外のうちになんらかの規則性がないか、また多くの例外をうみだす図式自体に問題はないか、再検討の余地がありそうに思われる。

図式の検証に際しては、もっぱらハルハ方言 (Khalkha) をとりあげるが、これは次の理由による。ハルハ方言は調査のゆき届いた方言のひとつであり、とりわけこの方言と蒙古文語との比較音声学の分野にはすぐれた研究の伝統がある。「 $*i$ の折れ」についても詳細で豊富な資料を利用することができる。⁽¹¹⁾ これと関連して、「 $*i$ の折れ」に関するハルハ方言の伝統的な図式は、多くの例外を伴った不完全な図式でありながら、他の蒙古方言や蒙古語史全体のモデルの役をつとめてきた。図式の不完全さが、この方言における $*i$ 音の複雑な変化の特殊性によるものであればなおさら、ハルハ方言の図式にさかのぼって検

証することが要請される。

① 「完全な折れ」と「不完全な折れ」

ハルハ方言の「^{*}i の折れ」に関する図式の原型は G. J. ラムステッドによって提示された次のようなものであった。⁽¹²⁾

a の前の i > i[•]a, a ; 語頭で j[•]a, ja.
e " i > i[•]e, e ; " ^{*}j[•]e > i.
u " i > i[•]u, u.
ü " i > i[•]ü, w ; 語頭で j[•]ü.
o " i > o.
ö " i > ö.

さきに見たポッペの図式も、これをそっくり受け継いで部分的に補充・修正したものであることは明らかであろう。

ハルハ方言の「^{*}i の折れ」に最も特徴的な現象は、たとえば「^{*}a の前」という同じ条件のもとに生じた「^{*}i の折れ」でありながら、その結果として a, i[•]a というように、必ずしも等しくない母音があらわれることである。よくあげられる例としては蒙古文語の mingran << 干 >> と miqan << 肉 >> に対応するハルハ方言の m^{i•}angge と maxxe (正書法ではそれぞれ мянга と max) の対がある。

ラムステッドから受け継がれ、以来今日に至るまでくり返されてきたこの事実を、われわれは「^{*}i の折れ」の単なるヴァリエーションとして見過ごすわけにはいかない。それらは、^{*}i 音の史的発展における二つの異なったタイプの変化として峻別されなくてはならない。つまり、mingran > m^{i•}angge の変化では ^{*}i が語頭子音と口蓋化した母音 a との間にわたり音と化して ^{*}i のなごりをとどめているのに対し、miqan > maxxe の変化では ^{*}i が後続の音節の ^{*}a に完全に同化して、^{*}i の痕跡は全く認められない。われわれは野村正良氏にならって、前者のタイプの「折れ」を「不完全な折れ」と呼び、後者のタイプを「完全な折れ」と呼ぶことにしたい。⁽¹³⁾ ^{*}i 音の発展の図式を検討するうえで、両者のタイプの「折れ」を厳密に区別しておくことの意義は、強調しすぎることはないように思われる。

ハルハ方言で、「不完全な折れ」はもっぱら語頭子音が ^{*}b, ^{*}m, ^{*}n, ^{*}g, ^{*}k であるときに観察される。すなわち、第 2 音節の ^{*}a の前で、

*bi- > bi̇ä-, *mi- > mi̇ä-, *ni- > ni̇ä-, *gi- > gi̇ä-,
 *ki- > xi̇ä- となる。(正書法ではそれぞれ бя-, мя-, ня-, гя-,
 хя-)これと同じ条件のもとに「完全な折れ」が生じているのは,*miqan >
 маххв (とその派生語)の場合に限られているように見える。⁽¹⁴⁾

「不完全な折れ」の例:

蒙古文語	ハルハ方言	
bira	бяр	《体力》
mindasun	мяндас	《絹》
gilγar	гялгар	《光沢ある》
kilbar	хялбар	《容易な》
nilqa	нялх	《幼児》

語頭子音が *j, *c, *s のとき, また *i が語頭にあるときは, 上の場合と様相を異にする。第2音節に *a をもつ場合を例にとって考えてみよう。ハルハ方言では, *ji と *ci が *a の前で「折れ」る場合に, 語頭の子音が口蓋音としてあらわれるもの (*ji- > dža-, *ci > tša- ; 正書法ではそれぞれ жа-, ча-)と, 非口蓋化子音としてあらわれるもの (*ji- > dza, *ci- > tsa- ; 正書法ではそれぞれ за-, ца-)の2種類の変化が認められる。この場合, 口蓋音 (dž, tš) を *i の痕跡とみなして「不完全な折れ」に数え, 子音が口蓋化していないものは *i の痕跡が認められないので「完全な折れ」とみなすことができる。例:

蒙古文語	ハルハ方言	
{ jirγa-	жарга-	《楽しむ》
{ jirasun	загас	《魚》
cf. jaqa	зах	《へり》
{ činar	чанар	《性質》
{ čiraj	царай	《顔色》
cf. čar	цаг	《時間》

*ji-, *ci- の連結の場合にも, さきに見た子音の場合と同様, 第2音節の *a の前で「完全な折れ」が起こった語は, やはりきわめて少数である。筆者の予備的な調査では, 上の2例(とその派生語)に加えて загатна- 《かゆい》(蒙古文語形 jiratuna- ~ jaratuna-)が見いだせるにすぎない。

*i が語頭に位置する場合、ハルハ方言では第2音節の*aの前で規則的に ja- (正書法では я-) となり、例外は見いだせない。ところが、ウラディーミルツォフはハルハ方言で語頭の j のあとに a と ä の異なった母音を認めている。⁽¹⁵⁾ (かっこ内は蒙古文語形)

jānǎk	(inar)	《いとしい人》
jāᠪᠴᠠᠮᠤ	(ibčaru)	《狭い》
jamā	(imaran)	《山羊》
jarᠨᠠᠭ	(irrai)	《すいかずら》
cf. jaw-	(jabu-)	《行く》

口蓋化母音をもつ最初の2例を「不完全な折れ」とみなし、他の2例を「完全な折れ」とみなすことができよう。ただしウラディーミルツォフは上の区別を一貫して用いているわけではなく、語数も多くない。より徹底した調査が必要とされる。

*i が語頭子音の*sのあとに位置するとき、ハルハ方言では、第2音節の*aの前で規則的に ša- (正書法では ша-) となっており、「折れ」が「完全」か「不完全」か区別できない。ただしウラディーミルツォフがここでも a と ä の2種類の母音を区別していることに注意を払っておこう。⁽¹⁶⁾

šādᠳᠠᠷ	(sidar)	《親しい》
šanǎᠭ	(sirai)	《足首の小骨》
cf. шар	(šar)	《去勢牛》

用例がきわめて限られており、また表記法にも若干のゆれがみられるのは残念である。

以上、「完全な折れ」と「不完全な折れ」の見地にとって、ハルハ方言において、*i が*aの前で「折れ」る場合をみてきた。語頭における*iと*si-の場合には若干の問題を残しながらも、変化の大勢は明らかであろう。要約すると、ハルハ方言では「完全な折れ」と「不完全な折れ」の区別は、*ji, *ciの連結の場合には、語頭子音の違いとして、それ以外の場合には母音の違いとして区別される。そして*aの前に位置する*iが「完全に折れ」てaとなるのは、きわめて少数の限られた変化であることから「不完全な折れ」を規則的な変化とみなすことに無理はないと思われる。

② 図式における「不完全な折れ」の位置

この段落のはじめに指摘したように、ハルハ方言の「*iの折れ」の図式が例外の多い不完全なものであるのは、一部には**i*音の発展に関してハルハ方言が特殊な変化をとげたことにもよっている。その特殊性の大きな部分を占めるのが「不完全な折れ」である。

(1) **a*の前の**i*

a*および二次的な*a*の前におけるi*音の発展について、ポッペは次のような図式を呈示した。

「モンゴール語、オルドス語、カルムイク語で、母音**i*は先行の子音を口蓋化することなく*a*になっている。それはハルハ語で*a*あるいは*i̇a*となり、ダグル語、ブリヤート語では先行の子音の口蓋化を伴って*ȧ*となっている。母音**i*は蒙古文語、中世蒙古語、モゴール語で*i*として残っている。」⁽¹⁷⁾

これがきわめて不完全な図式であることは、図式に付随して述べられた次のことばからもわかる。

「おびただしい例外があり、**i*はある言語で*a*となることがあるのに、別の言語では**i*が通例*a*となる同様な条件のもとにありながら*i*として残っている。」⁽¹⁸⁾

われわれは①でハルハ方言における「完全な折れ」と「不完全な折れ」の区別をみた。この中で、ハルハ方言の「不完全な折れ」を図式の中に適切に位置づけることによって「おびただしい例外」の数は半減する。

ハルハ方言において**a*の前の**i*の規則的な発展は「不完全な折れ」であることはすでに見た通りであるが、ハルハ方言の「不完全な折れ」に対応して、オルドス方言とカルムイク方言では規則的に*i*が保存されている。

例：⁽¹⁹⁾

Mo.	Urd.	Kalm.	Bur.	Kh.
nilqa	nilxa	nilxə	нялха ⁽²⁰⁾	n ^{i̇} älxə
miŋran	miŋga	miŋg ^o n	миŋга ⁽²¹⁾	mi ^{i̇} äŋgə
bida	bida	bid ^o	bəđ'i	b ^{i̇} ädde ~ biddə
širan	džira	džirn	žaraŋ	džare

ʒida džida džidə ʒada džadde
 čida- tšida- tšad^{a(22)} šada- tšadde-

さらに、「*aの*i*」について、語頭の位置におけるポッペの図式は次の通りである。

「語頭の*i*は、ダグール語、オルドス語、ハルハ語、ブリヤート語およびカルムイク語で ja- となるが、蒙古文語、中世蒙古語、モンゴール語およびモゴール語で i として残っている。」⁽²³⁾

この例として、ポッペは蒙古文語の imarān <山羊>, inar <いとしい人>, iryai <Cornelian cherry>, ilaya <はえ, あふ> をあげている。しかし、ハルハ方言でみたように, *imarān > ямаа, *iryai > яргай の変化は「完全な折れ」としての疑いがある。そこで、これらを除いて、残りの例をみると規則性が明らかになる。すなわち、オルドス語、カルムイク語に加えてブリヤート語においてもハルハ方言の「不完全な折れ」に対応するのは、i の保存である。

例：⁽²⁴⁾ (ブリヤート語は筆者が補った)

Mo.	Urd.	Kalm.	Bur.	Kh.
inar	inaḳ	in!ḡ	инаг ⁽²⁵⁾	janaḳ
ilaya	ilō	ilḗsn	илааһа ⁽²⁶⁾ (н)	jalā
		~ ilāsn		

さらに若干の例を加えておく。

Mo.	Urd.	Bur.	Kh.	
ilra-	ilḡa-	илга-	ялга-	< 区別する >
imarṭa	imaḡta	имагта	ямагт	< 常 用 >
idqa-	idxa-	идха-	ятга-	< 諫める >

こうして、ハルハ方言の「不完全な折れ」に対応して、オルドス、カルムイク、ブリヤート等の諸方言において*i* 音の規則的な保存を認めることができる。ハルハ方言に特徴的な「不完全な折れ」(*i > i̇a) の場合、さきに見たポッペの図式は成り立たないのである。

それでは「完全な折れ」の場合はどうか？ 「完全な折れ」の場合には、すでに呈示されているポッペの図式がそのままあてはまる。結局、ポッペの図式は、量的にはむしろ少数の「完全な折れ」の図式であって、

これとは異なった図式が成りたつ「不完全な折れ」をも同時に同じ図式で説明しようとしたところに無理があったのである。異なった原理に属す現象を一つの原理で割り切ろうとすれば例外は避けられない。しかも、例外的な少数の原理をもって規則的な多数を律しようとするれば、その例外は「おびただしい」ものとなって当然といえる。

(2) *uの前の*i

ポッペの図式によれば、通則として、

「*uの前の母音*iは規則的にuに発展している」⁽²⁷⁾

ハルハ方言もこの例に洩れない。言うまでもなく、この変化は「完全な折れ」に数えられる。*aの前の*iは、「完全に折れる」例は少数で、「不完全に折れる」方が規則的であったが、*uの前の*iはこれに対して、「完全な折れ」がふんだんに見い出せる。

例：

蒙古文語	ハルハ方言
nisun	нус <鼻 汁>
ǰiru-	зур- <描 く>
čisun	цус <血 >
niqu-	нух- <こねる>

しかし、*uの前の*iの「折れ」が「完全な折れ」だけに限られているわけではない。この点でポッペの図式はやはり片手落ちといえる。

*uの前の「不完全な折れ」の例：

蒙古文語	ハルハ方言
nicu-	няц- <退 く>
kidu-	хяд- <殺戮する>
kimural	хямрал <混 乱>
ǰirum	журам <法 規>
čiquł	чухал <重要な>

「不完全な折れ」の場合、*iが折れてあらわれる母音に注意せねばならない。上の例で明らかなように、*ǰi-, *či-の連結では口蓋化子音のあとにuがあらわれるが、それ以外(もっぱら*ni-, *ki-)ではi̇があらわれる。

以上述べてきたことをまとめると次のような表としてあらわすことが

できる。

○ *a と *u の前における「*i の折れ」(ハルハ方言)

後続母音 「折れ」の種類 語頭子音	*a の 前		*u の 前	
	不完全な折れ	完全な折れ	不完全な折れ	完全な折れ
*b, *m, *g *k, *n	i̇ä	a	/	/
*j *č	dž } +a tš }	dz } +a ts }	dž } +u tš }	dz } +u ts }
*s 語 頭	šä (?) jä (?)	ša ja	šu	?

稀

(3) *aru の前の *i と uru, *iru の前の *i

*aru の前の *i について、ポッペはオイラート文語とカルムイク語の特殊な変化を挙げたあと、

「残りのモンゴル諸言語において、母音 *i は、この位置で、*u あるいは $\bar{u} < *uru$ の前におけると同様の発展をとげた」⁽²⁸⁾

と述べている。さきに見た通り、ポッペは *u の前の *i について「規則的に u に発展する」としていた(前ページ参照)。ところが、*aru の前の *u が i̇ä に変化する例がある。

例：

蒙古文語	ハルハ方言	
kiraru	хяруу	< 霜 >
biraru	бяруу	< 二歳牛 >
bidaru	бядуу	< にぶい >

上例では、*aru の前の *i は、*a の前の「不完全な折れ」に準じている

ようにみえる。しかし次の例から*aruの前の*iはむしろ*uの前の「不完全な折れ」と同じタイプであることがわかる。

蒙古文語	ハルハ方言	
čilarun	чулуу	< 石 >
cf. sibarun	шувуу	< 鳥 >

他方*uru, *iruの前の*iは,*uの前の「完全な折れ」の変化に準じている。

蒙古文語	ハルハ方言	
niruṛun	нуруу	< 背 >
bisiṛun	бушуу	< 速 >
ただし niluṛun	нялуу	< いやな >

③ *iが常に保存される条件の例外

ポッペの図式によれば、母音*iは、

- (a) 単音節語幹、および
- (b) 第2音節に*iか*eを含む多音節語幹で、規則的にiとして残る。ハルハ方言では、上の条件にあってiが保存されている場合と、上の条件内にあってiが折れていると思われる語が若干認められる。

(1) *üの前の*i

「*üの前の母音*iはüあるいはさらにwとなる。ダグール語では*iはiとして残っている」⁽²⁹⁾

例:	蒙古文語	ハルハ方言	
	nidün	нүд	< 目 >
	sidün	шүд	< 齒 >
	ničügün	нүцгэн	< 裸 の >
	ṽisün	зүс	< 容ほり >
	nigül	нүгэл	< 罪 >

ところが,*uの前の*iが規則的にuとなり、若干の語でi̇aとなったように,*üの前の*iは規則的にw(=Y)となり、若干の語ではi(=и)として残っているのである。

例:	蒙古文語	ハルハ方言	
	ṽirmüsün	жирэмсэн	< 妊娠した >

kitüge	хитэг	《船尾》
gilgügür	гилгэр	《てかてかした》
ǰigür	жигүүр	《翼》

*a と *u の前におけるハルハ方言の「*i の折れ」を論じた際に、*i の痕跡が認められるか否かによって、*i 音の発展に二つのタイプを区別したが、*ü の前においてもこの区別が有効となるのではないだろうか。*i > w となる規則的な変化を「完全な折れ」とみなし、他方、上の例にみるような i 音の保存を「不完全な折れ」と同列に置くことによって、ハルハ方言の *i を発展に全体をより一貫したものとして把握することができる。

(2) *egü の前の *i と *ügü, *igü の前の *i

*egü の前の *i についてポッペの述べるところは、「ü となり、あるいはさらに w に発展している」⁽³⁰⁾ とある。つまり *ü の前における変化の説明と全く同じである。さらに *ügü および *igü の前の *i についても同じ説明がなされている。⁽³¹⁾ ここで、*ü の前の *i の発展の二つのタイプのうち、i を保存している方をもあえて「不完全な折れ」と呼ぶと、*egü の前の *i には「不完全な折れ」が生じていることがわかる。

例：	蒙古文語	ハルハ方言	
	bilegü	билүү	《砥石》
	ilegü	илүү	《まさった》
	bitegüü	битүү	《閉じた》
	ǰikegün	жихүүн	《冷たい》

一方、ügü の前の「完全な折れ」の例には、

	蒙古文語	ハルハ方言	
	nidügür	нүдүүр	《すりこぎ》

をあげることができる。

(3) *e の前の *i

ポッペの図式では、*e の前の *i は規則的に i として保存されることになっているが、この条件のもとに *i が「折れ」ていると思われる語が若干ある。それらは、蒙古文語形に、第1音節に i をもたない形も見られるのでより確かな証拠を必要とするが、一応資料としてあげておく。

例：	蒙古文語形	ハルハ方言	
	ǰibe ~ ǰibi ~ ǰebi	зэв	《鏽》

čike ~ čeki	цэх	《真直ぐな》
ǰime ~ ǰeme	зэм	《過失》
ǰigesü ~ ǰegesü	зэгс	《葦》

またポッペが例外として説明しようとした нэг (nige) 《1》 もこれに加えることができよう。これらを折れとみなしうるとすれば、*e の前の *i にも 2 種類のタイプの発展が認められることになる。すなわち、折れ (= 「完全な折れ」) と i の保存 (= 「不完全な折れ」) の二つである。

4.

ハルハ方言における *i 音の発展を考察する際に、*i 音の痕跡が認められるか否かという観点に立って、まず *a と *u の前の位置において「不完全な折れ」と「完全な折れ」を区別することから出発した。さらに *e と *ü の前の位置においても「i の保存」と「折れ」という区別が上の観点にあてはまることを論じた。問題はすでに「折れ」の領域を越えて *i 音の発展の図式全体に及んでいる。

「*i の折れ」は *i 音の史的発展のうちから「i が保存されている」場合を除外した概念である。1903 年にラムステッドが蒙古言語学に Brechung (折れ、割れ) という用語をもってこの現象をとりあげたとき⁽³²⁾、彼がいわゆる「不完全な折れ」を主眼においていたことは疑いない。というのは、Brechtung は「隣接する子音の影響のもとに単母音が二重母音化すること」⁽³³⁾をあらわす印欧比較言語学のタームを借りてきたものだったからである。「*i の折れ」はちょうど 1 枚の皿が 2 枚に「割れ」るように、また 1 本の棒が 2 本に「折れ」るように、母音の *i が i̇a という 2 つの母音になることを意味していた。さきに見たラムステッドの「*i の折れ」の図式が、今から見ると不必要に「わたり音化」を強調しているのもうなずける。この見方はウラディーミルツォフにもそのまま受け継がれているが、ポッペに至って、単なる「同化」の同義語として用いられるようになった。しかし、力点の置きどころは違っても、ラムステッド以来一貫しているのは、*i の発展の中で、i として保存されるものとは切り離して「*i の折れ」を捉えていることである。

しかし、すでに見てきたように、「折れ」のうちの多くの部分を占める「不完全な折れ」は、「完全な折れ」とは異質の、むしろ「i の保存」とパラレル

な関係に立っているのである。次の表を参照されたい。

	$*i$ の痕跡の保存 ↔ $*i$ の完全な消失
$*a, *u$ の前	不完全な折れ ↔ 完全な折れ
$*e, *ü$ の前	i の保存 ↔ 折れ

われわれは、「不完全な折れ」と「 i の保存」とをまとめて、それ以外のすべての「折れ」と対立させねばならない。仮に前者を第Ⅰ類の発展、後者を第Ⅱ類とよぶと、第Ⅰ類の図式は次のようになる。

- (1) $*a$ の前の $*i$ → $i\grave{a}$
 (2) $*ü, *a\gamma u$ " $*i$ → $i\grave{a}$
 (3) $*e$ " $*i$ → i
 (4) $*ü, *egü$ " $*i$ → i

($*j_i-$, $*c_i-$, $*s_i-$ の連結は、 $*a$ と $*u$ の前でそれぞれ $d\check{z}a-$, $t\check{s}a-$, $\check{s}a$; $d\check{z}u-$, $t\check{s}u-$, $\check{s}u-$ となる — 後者は稀。また語頭の $*i$ は $*a$ の前で ja ; $*e$, $*ü$ の前で i となる。)

また第Ⅱ類の図式は次のとおり

- (1) $*a$ の前の $*i$ > a
 (2) $*u, *u\gamma u, *i\gamma u$ " $*i$ > u
 (3) $*e$ " $*i$ > e
 (4) $*ü, *ü\gamma u, *igü$ " $*i$ > $ü$

($*j_i-$, $*c_i-$ の連結は $*a$, $*u$ の前でそれぞれ $dza-$, $t\check{s}a-$; $dzu-$, $tsu-$ となる)

註

- (1) 「蒙古語」はモンゴル系の言語一般をさす。この用法は小沢重男教授の提唱に従った。「蒙古文語」についても同様。cf. 小沢重男「蒙古語の歴史と系統」, 服部四郎編『言語の系統と歴史』東京, 1971, 247—248頁。
 (2) N. Poppe, Introduction to Mongolian Comparative Studies, Helsinki, 1955 (以下 Poppe, Introduction と略す), p. 10.
 (3) 服部四郎「蒙古語の口語と文語」, 『蒙古学報』第2号, 1941,

174—180頁。

- (4) 服部四郎「蒙古語文語の起源について」、『言語研究』第3号、1939、1—27頁。
- (5) 中世蒙古語の文献のうちにも「*iの折れ」が少数ながら観察されることはよく知られている。cf. N. Poppe, “On the So-called Breaking of *i in Mongolian”, Ural-Altäische Jahrbücher, Bd. 28 : 1—2, 1956, S. 43—48.
- (6) Poppe, Introduction, p. 16.
- (7) *Ibid.*, p. 37.
- (8) 註の(2)を参照。
- (9) 以下Poppe, Introduction, pp. 33—44による。なお、第1音節に*iがある場合でも、*ira, *ige, *iru, *iguおよび*igiの連続は「長母音」のセクション(同書pp. 59—76)で扱われていて、ここには含まれていない。
- (10) ブリヤート方言に関するこの説明は再検討を要する。現代ブリヤート文語の正書法では、女性語の語頭ではиを書かずにэのみを書き、語中では硬子音のあとにэを、軟子音のあとにиを書く。つまり正書法では女性語において母音のiとeを書き分けていない。cf. M. Н. Имехенов, Ц-ж. Ц. Цыдыпов, Буряад хэлэнэй грамматика, Нэгэдэхи хуби, Фонетикэ, морфологи, Улаан-Удэ, 1968, стр. 22.
- (11) G. J. Ramstedt, “Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen”, Journal de la Société Finno-ougrienne, XXI : 2, 1903, S. 45—47; Б. Я. Владимирцов, Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика, Ленинград, 1929, стр. 176—190.
- (12) Ramstedt, a. a. O., S. 46.
- (13) Masayosi Nomura, “On Some Phonological Developments in the Kharachin Dialect”, Studia Altaica, Festschrift für Nikolaus Poppe, Wiesbaden, 1957, p. 136.
- (14) 註の(9)を参照。*iraの連結では、*nira- <貼る>が「完全な折れ」を起している：ハルハ方言 nā-。

- (15) Владимирцов, Указ. соч., стр. 426.
- (16) Там же стр. 432.
- (17) Poppe, Introduction, p. 39.
- (18) loc. cit.
- (19) loc. cit. 例はポップェのあげているものをそのまま利用する。略語: Mo. = 蒙古文語, Urd. = オルドス語, Kalm. = カルムイク語, Bur. = ブリヤート語, Kh. = ハルハ語。また $\check{y} = \dot{y}$
- (20) К. М. Черемисов, Бурятско-русский словарь, Москва, 1973. стр. 347.
- (21) 現代ブリヤート文語では мянга(н) cf. Черемисов, Там же, стр. 314.
- (22) G. J. Ramstedt, Kalmückisches Wörterbuch, Helsinki, 1976 (rpt.) によれば “ tšidəxə können (selten), = tšadəxə ” ともある。(S. 438a)
- (23) Poppe, Introduction, p. 39.
- (24) Ibid., p. 40.
- (25) Черемисов, Указ. соч., стр. 278.
- (26) Там же, p. 277.
- (27) Poppe, Introduction, p. 40.
- (28) Ibid., p. 41.
- (29) loc. cit.
- (30) Ibid., p. 42.
- (31) loc. cit.
- (32) Ramstedt, a. a. O., S. 45.
- (33) E. Sievers, Grundzüge der Phonetik zur Einführung in das Studium der Lautlehre der indogermanischen Sprachen, 5. verbesserte Aufl., Leipzig, 1901, S. 293.